Ｖ．２．新任教員のプロフィール〈自己紹介〉

（２）言語社会専攻

トルコ語　特任教員
アクバイ　オカン　ハルク

2020 年 4 月から言語文化研究科トルコ語専攻に所属しております。新型コロナウィルス感染症の影響で飛行機が欠航し、当初の予定通りに来日することができませんでした。そのため、先生方や職員の皆様には、ご心配とお手数をおかけ致しました。改めまして、御礼申し上げます。

私は 1973 年にトルコのエスキシェヒルという街で生まれました。その後、首都アンカラに移り、小学校、中学校、高校、大学時代をそこで過ごしました。ごく普通のトルコ人家庭で育ちましたが、言語環境は若干特殊でした。色々な言語を話す人が身近に多くいて、彼らが家族と共に、長期間、滞在することがありました。子供心に彼らが話す言語は音楽に似て、その意味を理解できたらと思っていたという記憶があります。私の言語への興味はそのあたりから始まりました。

そのうち、身近に話者がいない未知の言語にも興味を持つようになりました。世界には色々な言語があって、文化があるという当たり前の事実が、当時の私にはとても新鮮なことに思われました。そして、どの言語を学習してみようかと迷っている時に、日本語と出会いました。聞いたことのない音声、見たことのない表記、こんな魅力的な言語を理解できる人になりたいと思いました。そのため、当時、トルコで唯一日本語を学べる大学であったアンカラ大学に進学しました。

日本語とトルコ語は文法構造が同じです。学習する未知の言語を選ぶ際、ただ単に魅力的な言語を選んだのではなく、無意識のうちにそれも意識していたのかもしれません。しかし、本格的に学習を始めてみると、初級の時は美しいとすら思った表記に、中級以降は類似しているがゆえに起こる誤用や、日本語が文化をまとった時に醸し出す空気感に苦戦しました。それを何とか克服したいと思い、大学卒業後は専門を対照言語学に定め、東京外国語大学大学院で修士号を、アンカラ大学大学院で博士号を取得しました。その他に、日本の大学では東京大学大学院と成城大学民俗学研究所でも研究員として在籍しました。その一つ一つが糧となり今の私があるように思います。

大学に職を得て約 25 年、時代は流れ社会は変化していますが、日本人もトルコ人も、かつての学生も今の学生も、学生たちの本質に大きな違いや変化はないように思います。皆、より良い将来を夢見て、奮闘しています。そのような彼らに接する時、刺激を受けます。また、大阪大学にお世話になるのは二度目です。一度目の時も最善を尽くし、丁寧に日々を過ごしていたつもりでしたが、全うしきれなかったという気持ちが強く残りました。これまで

の人生の中で初めての経験でした。そのため、再挑戦する機会をいただき、大変嬉しく思っております。今年は新箕面キャンパスが始動する年でもあります。心機一転、完全燃焼を目指します。どうぞよろしくお願い申し上げます。

ベトナム語　助教
近藤　美佳

2020 年４月に着任いたしました、近藤美佳と申します。日本で学び育つベトナムにルーツを持つ子どもたちが、ベトナムのことばと文化を自身の中により良く位置づけながら、日本社会でより良く生きていくための一助になりたいと願い、研究・教育活動をしています。

ベトナムとの出合いは、小学生の頃に観たテレビ番組でした。番組中で紹介された民族衣装アオザイに魅せられ、「いつかあの衣装を着てみたい」、そう思ったことが始まりです。そんな憧れだけで入学した大阪外国語大学で、ベトナム語専攻の“濃い”教授陣と仲間たち、そしてベトナム人留学生の中で揉まれることになり、ベトナム語ということばに、ベトナムという国にどうしようもなく惹きつけられるまでそれほど時間はかかりませんでした。

憧れの地、ベトナムはハノイにおける１年間の語学留学から帰国した学部３年時、わたしに新たな出会いが訪れました。大阪府八尾市のとある小学校から、ベトナムルーツの子どもたちを対象とする母語教室の手伝いをしないかとお声掛けいただいたのです。日本にいながらベトナム人の両親の話すことばを浴び、作る料理を食べることができるなんてなんて羨ましい！とこれまた“憧れ”だけで突っ走って参加した活動でわたしが出会ったのは、「なんでベトナム語なんかやらなあかんねん！」と悪態づく子どもたちでした。このときのショックは今でも忘れられません。ですが、そんな子どもたちと歌って踊って走り回っているうちに、この子たちは実はベトナムが嫌いではないけれどベトナムとの向き合い方がよくわからず悩んでいるのだということや、様々な環境がその思いや迷いを素直に表現することを許さないのだということが見えてきたのです。そして、この状況は在日ベトナム人の子どもに限らず、何かしらの「生きづらさ」を抱えている多くの人と共通するのではないかと考えるようになりました。ベトナムのことばと文化を愛し学んだいち日本人として、わたしにできることは何かということを、これからも子どもたちと一緒に泣き喚き、笑い転げながら探り続けていきたいと思っています。

大阪外国語大学に入学して 15 年、同大学を卒業して 10 年となるこの節目の年に、そして箕面キャンパス移転１年前というタイミングで、こうしてここに「再入学」できたことにはどんなに感謝してもしきれません。ある国のことばと文化の学習を通じ、言語学習の難しさ、ことばが通じないもどかしさ、異文化に対する違和感を経験したことのある人間は、同じ思いを抱える人々と出会ったとき、その経験を思いやりに変えて接することができるはずです。そのような思いをこれから新たに経験していく人々を支えていきたい。自分自身がその経験を積んだ学び舎でそれを実現できるのであれば、これに勝る喜びはないと思って

います。
　よろしくご指導ご鞭撻のほど、お願い申し上げます。

デンマーク語　特任教員
Lauritz Korfix Schultz

I am from Denmark and hold a master in Danish and History from Roskilde University. Before moving to Japan, I have been holding different teaching positions in: Adult education, Danish as a Foreign Language, senior folk high school and from 2017 onwards in upper secondary school. During this time, I have also been working as a journalist. Now, I am delighted to teach Japanese students my native language and to be working with Danish culture and society from various points of view. An important aspect of my professional undertaking is not only *what* to teach but also the didactic question of *how* to teach.

My main task is first and foremost to improve the Danish language skills of my students, since this provides them with the necessary tools to become familiar with Danish traditions, culture, literature, politics, music, arts, history and contemporary issues. One of my current projects evolves around the circumstance that Denmark, on the one hand, is said to be one of the happiest countries in the world, but, on the other hand, by reading Danish literature we see that there are indeed other, darker things to be said about Denmark as well. For example, in the last decade, Danish fiction has increasingly shed light on the rising inequality between rich and poor in average life expectancy, unhealthy ways of living, and level of education among other inequalities. Another issue taking centre stage in newer Danish fiction is that of depression. What I am especially interested in here, is the historical and sociological point that Denmark has underwent a change from being a society duty to being one of responsibility. As a result of this change, the rising demands from society and the overwhelming panorama of possibilities confronting the self have caused mental exhaustion and depression to become a social illness in the Danish population.

フィリピン語　講師
白石　奈津子

2020 年着任の白石奈津子と申します。フィリピン農村部における民族間関係について、文化人類学的な共同体論や広義のコミュニケーション論的視点から研究しています。
　この自己紹介文の執筆依頼をいただいた際、他の先生方は何を書かれているのだろうと思い、まずは検索してみました。するとどうも、出身地のお話から始めている方が多い様子。では、私もそれに倣うかと考えたのですが、どうもこの「出身は？」というお話をするときに、少しだけ違和感を覚える自分がいます。

まず私、生まれは佐賀県の武雄市という場所です。辰野金吾設計による朱塗りの楼門を備えた温泉のある、小さな田舎町です。小学校に上がる直前に隣県福岡に引っ越し、大学入学以降は10年近く京都を基盤に生活していました。さて、そんな私が「出身は？」と聞かれるとき、「どこで生まれたのか」という意味であれば、それは佐賀と答えるべきでしょう。他方で京都に暮らしていたころは、その質問の内に「どこの地方から出てきたのか」というニュアンスを感じ、福岡と答えていました。そんな「上洛」時の気分もすっかり薄れ、新天地・大阪は北摂の地に移住してきた今、改めて「出身は」と聞かれたとき、さてどこと答えるべきなのか。

フィリピン語には、出身を尋ねる *Taga-saan ka?* という表現があります。*saan* とは場所を表す疑問詞なのですが、それに付随する *taga-*という名詞接辞は、1）地名を伴う際には“～出身、土着の”“～居住の”“～からやってきた”という意味を持ち（*taga-Osaka* など）、2）大学名などを伴うと“〇〇大生”“〇〇大卒”という意味を形成します（*taga-Osaka University* など）。さらには、3）何らかの職業や役割を表現することもできます（“*luto*/料理”という語を伴って“*tagaluto*/料理担当”など）。常々、この名詞接辞 *taga* は、ある存在がどういった事柄や因縁をまとって成り立っているのか、そうしたネットワーク的広がりを想起させる表現だなと感じます。

フィリピンにいると、この *taga-*に関連する表現を非常に頻繁に耳にします。それはこの短い接辞が持つ表現の幅だけでなく、対峙した誰かのもつ帰属やつながりを絶えず確認しようとする、フィリピンにおけるコミュニケーション習慣にも由来しているでしょう。そして、そんな *taga-*が展開するつながり、ネットワークをめぐる意味の広がりに立って考えた時、私が taga-何、taga-何処であるかへの回答は様々なバリエーションを持つわけです。

そんなフィリピン語に魅了され、どうにも「出身は？」という表現の限定性に居心地の悪さを覚えるようになってしまった自分がいます。同時に、言語を学び、向き合う面白さというのは、ひとつ、こうしたある種の感覚的ずれや違和感の経験にあることを、この外国語学部に着任して改めて考えるようになりました。そうした様々な経験や知見を学生や同僚の先生方とともに育んでいけるこの環境に心から感謝し、一層励んでいきたいと思います。奇妙な自己紹介となってしまいましたが、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

ロシア語　助教
髙橋　健一郎

2020年4月に着任いたしました髙橋健一郎と申します。専門はロシアの言語と音楽で、最近は特に20世紀初頭のロシア文化における音楽思想に関心をもっています。

札幌で生まれ育ち、もともとはピアニストになろうと芸大進学を考えていましたが、高校2年で進路を変更し、宇宙物理学者を目指して東京大学理科一類に入りました。しかし、ほどなく理系の学問に挫折。その後いったん科学史・科学哲学を専攻しかけましたが、結局ロ

シアの地域文化の研究に落ち着きました。その頃第二外国語でロシア語を学んでいたのですが、ちょうどソ連崩壊直後で、それまで埋もれていたロシア文化の新資料が表に出てきたり、新事実が次々と明らかにされたりして、当時教わっていた先生方が大変生き生きと研究していらしたのに刺激を受けたのでしょう。とにかく、ロシアの研究が面白そうに感じたのでした。中でも言語の問題に関心をもち、修士課程と博士課程（うち 2 年間モスクワに留学）の 7 年間、そしてそれからしばらくの間、ソ連社会のプロパガンダの言語分析を研究テーマとしていました。

2003 年に札幌大学のロシア語学科（後に「ロシア語専攻」）に専任講師として赴任し、そこで 17 年間にわたり、ロシア語教育に携わりました。2005 年に上記のテーマで博士号を取得してからは、徐々に研究テーマが変わり、この 10 数年はロシア音楽の研究に軸足をおいています。

2019 年 1 月に『ロシア・アヴァンギャルドの宇宙論的音楽論――言語・美術・音楽をつらぬく四次元思想』（水声社）という研究書を上梓しました。ジャポニズムに影響を受けた 20 世紀初頭のロシア歌曲の研究から始まり、そこに関わるアヴァンギャルド芸術の四次元思想、宇宙論を紐解いていった著作です。その執筆プロセスは、音楽と宇宙論、言語論など、それまで触れてきた関心分野を一つ一つなぞっていくようなものでした。いろいろなことに首をつっこむと、底の浅いものしか出てこない恐れもありますが、文化、芸術の世界はいろいろなものが絡み合い、渦巻いているものでもあります。その深い世界について論じるために、中途半端になることを恐れつつも、もうしばらくはいろいろな分野に目配りしながら、その世界に踏み込んでいくことになるだろうと思います。

大阪大学は熱心で優秀な学生が多く、そこでロシア語の授業とロシア芸術に関するゼミを持てることは大きな喜びです。学生たちの知的成長に少しでも寄与できるよう、自分も精進していきたいと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。

スウェーデン語　特任教員
Marie THERRYDOTTER

I’m from Sweden and I’m currently working with teaching Swedish language and Swedish culture at Osaka University. Before that I’ve been teaching the same topics to exchange students, immigrants and foreign university staff for three years at Malmö University and latest at Lund University for seven years.

At Lund University I also graduated in contemporary Swedish and later continued my qualification at Gothenburg University where I studied Teaching Swedish as a second language.

During my career I have had some lucky opportunities to work with languages from several perspectives. One of them is one-to-one teaching to foreign professionals from variating branches and companies in Sweden.

Another experience has been building up a Swedish language department at the company *Swedish HealthCare Academy* which is arranging Swedish specialist training to foreign medical doctors and dentists. I was responsible for the whole language training from beginner level to clinical practice which gave me useful insights in what kind of challenges foreign professionals might face working in a foreign country.

I'm still very interested in developing branch teaching as there are many qualified immigrants in Sweden that are in a need of special language training to be able to continue their career in Sweden.

The Swedish language has also taken me to Hyderabad in India where I was teaching Swedish to master students going to Sweden for a Swedish master or PhD studies. In India I realized how significant cultural knowledge is for a language student.

As I have been interested in languages since I was very young I went to France as a young girl and got an exam in French at Sorbonne and a diploma in business French at Sorbonne and La Chambre de Commerce et d'Industrie de Paris in Paris. Other language studies have been Spanish at the University of Salamanca in Spain and Italian at l'Università per Stranieri di Perugia in Italy. Altogether these studies led to my very first teaching job in French and Italian.

Being a second language student myself in three languages for several years has given me valuable experiences and insights in language learning that I can use in my teaching today.

ドイツ語　講師
濵田　洋輔

皆様もご存知の通り昨年度は大学へ出向くことも街へ出ることも少ない一年でしたし、正直なところ、大阪に住んで大阪大学で働いているという実感はまだ薄いのですが、ドイツ語専攻に着任してから一年が過ぎました。

専門は哲学で、近現代の西洋哲学（特にドイツ哲学）を中心に学んできましたが、ここ数年は最新の自然科学（特に進化論）の知見を取り入れた哲学の在り方を模索しています。

経歴としましては、慶應大学を卒業後、ソルボンヌ大学、ベルリン・フンボルト大学を経て最後はハンブルク大学で博士号を取得しました。帰国してからは、東京大学の科学哲学研究室に研究員（学振 PD）としてお世話になり、その後この言語文化研究科に拾って頂き今日に至ります。

こう書くと、大層な人間に思われるかもしれませんが決して大層なものではありません。教職課程科目の新規認定の為だったと記憶しているのですが、過日事務から履歴書を提出するようお願いされました。それでこれまで通りの履歴書を提出したところ、不備があるので修正して提出し直して欲しいとのお返事を頂きました。不備というのは経歴の空白期間に関するものだったのですが、非常勤講師という職歴でも構わないので空白期間を全て埋めて欲しいとのことでした。また、正規の職についておらず非常勤講師もしていない場合は、

無職（もしくは主夫）と記入して欲しいとのことでした。それで改めて履歴書を作成したところ、「無職」という言葉がずらりと気持ち良く並んだ履歴書が出来上がりました。ぱっと見た人には（あるいはじっくり見た人にも）、ああこの人はずっと無職なのだなといった印象しか残さない様な履歴書で、こんな人間が教職科目を担当して良いのだろうかと不安を覚えて、本当に自分で大丈夫なのでしょうかと事務に確認さえしたほどです。

事務の方からの慰めのお言葉とお許しを頂いて、今年度はその教職課程科目を担当しているのですが、その履歴書のことを思い出すと、その授業を受けている学生のみならず他の学生にも申し訳ない気がします。また、哲学など学ぶ予定どころか触れる予定も全くなかったであろう外国語学部の学生達に対して哲学の授業を行うことに関しても、一年経ってなお、申し訳なさの入り混じった迷いを覚えています。

そのように躊躇いや迷いはあるのですが、であればこそ猶更、より良い教育が提供出来るよう努力して行きたいと思っていますので、経験豊富な先生方や大学職員の皆様方の御助言を頂けますと幸いです。

フィリピン語　教授
宮原　曉

望外にも新任教員のプロフィールを書くという依頼をいただき、せっかくの機会でもあるので（誤った依頼ではないといいのだが）、研究テーマということについて、このところの自問を記してみたい。

「わたくし」は、ことのほか研究テーマについて人に伝えることが苦手である。知りたいと思っていることを名ざしすることができたら苦労はない。名ざしできないから知りたいと思うのだ、などと考えてしまうのだ。だから専門分野や研究テーマを説明する必要に迫られたときには、ありきたりのことしか言えない。そうしたことは、じつは知りたいとはかけ離れている。勿体つけたり、考えすぎたりしているのではなく、要は「雲をつかむようなところから始めたい」ということだ。

その「雲」とはどんなものか。いくつかの鍵となりそうな概念が思い浮かばないわけではない。ディスクール、多声性、インターテクスチュアリティ。だとすれば、「雲」（対象）は、実際に発話された生きたコトバとしての「声」と言ってもよさそうだが、そうした「声」が何と対立しているのか、あるいは相互に補完しあっているのかがわかってこないことには無造作に「声」とは言い難い。例えば「声」は、「国語」や「母語」という名で呼ばれるような規範的な音声言語と対立しているのだろうか、そうした規範的な音声言語を支えるとも考えられがちなエクリチュールは「声」と対立するのだろうか。それとも、そこに生じているのは、「オラリティとリテラシーの分断」とは異なる事態なのだろうか。このような問いを継いでいくと、「声」は従来の定義を越えた広がりを持つようにも思われる。浪花節の「胴声」を用いた語り、南音での文音の混在、唸経や陀羅尼、九九における「声」は、バフ

チンが想定した「声」とはやはり違っているだろうし、そうした「肌理」（granular）としての「声」をつぶさに記述していくことは、多声性やインターテクスチュアリティに係るこれまでの理論に改訂を迫るかもしれない。だが、今のところ「雲」は「雲」のままである。

「声」について、また「声」とエクリチュールの関係についてのエスノグラフィックな記述の企ては、「マイナー文学研究」と呼び得るかもしれない。マイナー文学とは、作り手が「自己」の言語（と思い込んでいる言語）ではなく、「他者」の言語（と思い込んでいる言語の断片）を用いて創作する文学である。そこには、支配的で規範的な言語に依拠しようとして痕跡と、その欠如や困難さが共存する。Sinophone や沖縄文学、アジア系アメリカ文学など、“XX phone literature” と呼ばれるポストコロニアル文学の一種がそれである。そこでの文学とは、「文学として読まれたテクスト」である（読めるものは食堂の菜単でも、墓石でもなんでも読む）。もちろん、文学をこのように理解するというのは一般的ではなく、「わたくし」が文学を研究していると言ってもまともに取りあわれることはない（文学研究の分野で科研を申請してもまず通らない）。そうしたわけで「わたくし」の「雲」は、「マイナー文学」であり、同時にそうではないのである。

（1997 年に大阪外国語大学に着任し、いろいろな部局を転々としました。その間、卒業した大学と所属した組織はことごとく消滅し、2021 年にやっとのことで言語文化研究科にたどり着きました。冒頭「望外」と書いたのはこのためです。故郷が５つ。名前の呼び方が２つ。「日本語」の文章が読めない。）